



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

錯視入門

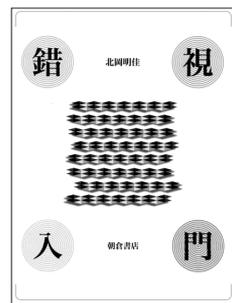
北岡明佳

錯視の本は比較的少ない。だまし絵の本には、学術系統は少ないものの、エンターテインメント系統や芸術系統、さらには数学系統まであって数も種類も豊富であることと対照的である。

実は、日本語の「錯視」の指し示す範囲は狭いのに対して、英語の“visual illusion”はだまし絵も含む広い概念である。日本でも、だまし絵の一種ともいえる不可能図形や反転図形を「錯視」の仲間に入れている書物は少なくない。それなら毒を食らわば皿までと、だまし絵も含めて錯視を解説した

“visual illusion”の学術入門書が本書である。各錯視・だまし絵の基本的な文献は押さえてあるが、それらを説明する諸仮説の比較検討を深めるところまでには至っておらず、あくまで入門書である。立体視や恒常性まで錯視扱いで登場するので、「知覚心理学入門」として使える可能性もある。

本書は心理学の専門的学術書であるが、見かけは絵本のように見えるので、そのようにだまされていただいて、ご家庭に1冊というのもいかがであろうか。



著 北岡明佳
発行 朝倉書店
B5変形判 / 248頁
定価 本体 3,500円十税
発行年月 2010年6月

きたおか あきよし
立命館大学文学部教授。専門は知覚心理学。著書はほかに、『トリック・アイズグラフィックスNEO』（単著、カンゼン）、『脳科学と芸術』（分担執筆、工作舎）、『人はなぜ錯視にだまされるのか?』（単著、カンゼン）、『心理学フロンティア』（分担執筆、新曜社）、『この世はすべて錯覚だ』（共著、講談社）、『錯視完全図解』（監修、ニュートンプレス）など。

アナログ研究の方法

（臨床心理学研究法シリーズ 第4巻）

杉浦義典

アナログ研究とは、大学生など非臨床群を対象とした臨床心理学の研究です。「間に合わせ」のような印象をもたれるかもしれませんが、決してそうではありません。臨床の難問を解決するため、臨床心理学と他領域をつなぐため、さらには、健康とは何だろうと考えるために、不可欠な研究です。

まずは、臨床群と健常群はこれまで思われていたよりも近いという最新の知見を紹介しました。続いて、臨床心理学の研究が明らかにすべき大きな課題である病理の発生と改善のそれぞれについて、

個人差研究と実験（介入）研究という二つの方法によるアプローチを紹介しました。研究の具体例もふんだんに盛り込んでいます。アナログ研究は基礎と臨床の近さが特長の一つなので、臨床以外の研究にも役に立つのではと思います。

筆者は卒業論文以来、アナログ研究をしてきました。学生時代に、こんな本があったらよいのという思い。教員になって、こんな本があると便利だろうなという思い。そんな実感を込めています。せっかくの卒論や修論（博論）です。思いきり楽しんでみませんか。



著 杉浦義典
発行 新曜社
A5判 / 288頁
定価 本体 3300円十税
発行年月 2009年9月

すぎうら よしのり
広島大学大学院総合科学研究科准教授。専門は臨床心理学、パーソナリティ心理学。著書はほかに、『パーソナリティと臨床の心理学』（共著、培風館）、『不安障害の臨床心理学』（共編著、東京大学出版会）、『侵入思考』（共訳、星和書店）、『Problem-solving model of worrying（ストレス対処から見た心配の認知的メカニズム）』（単著、風間書房）など。



老いとこころのケア

老年行動科学入門

佐藤眞一

編著 佐藤眞一・大川一郎・谷口幸一
発行 ミネルヴァ書房
A5判 / 224頁
定価 本体 3,000円＋税
発行年月 2010年7月

さとう しんいち
大阪大学大学院人間科学研究科教授。専門は老年心理学、生涯発達心理学。著書はほかに、『エイジング心理学』（共編著、北大路書房）、『介護カウンセリングの事例』（編著、一橋出版）、『結晶知能』革命』（監修、小学館）、『事例のまとめ方と発表のポイント』（編著、中央法規出版）など。

高齢者ケアは人と人との間の営みであるため、きわめて心理学的な行為です。

1970年代から、心理学を中心に、社会学、福祉学、医学、看護学、政策学などの研究者や実践家を加え、老年行動科学を標榜して研究とケース・スタディを重ねてきた私たちのグループは、日本老年行動科学会を設立し、同時に、心理学界や老年学界で発言してきました。

本書は、そのような私たちのグループのメンバーによって、ケアする側とされる側の心理的側面を意識しながら書かれました。とく

に、「第Ⅰ部 高齢者のこころの理解とケア」では、目の前にあたかもケアの風景が広がっているかのような文章が連続します。そして、「第Ⅱ部 老年行動科学の基礎」では、高齢者ケアの基礎となる心理、社会、医学の各側面についての重要な知見が示されます。

高齢者ケアは、大衆長寿時代を生きる私たちにとって重要な関心事です。そこには、いずれは自分自身がケアを受ける立場になるという予感も含まれています。ケアとは、まさに自他を区別することのできない営みなのです。



子どもの暮らしの安全・安心 ～命の教育へ 1, 2

内田伸子

(1巻) A5判 / 152頁
編著 内田伸子・袖井孝子
(2巻) A5判 / 156頁
編著 袖井孝子・内田伸子
発行 とみに金子書房
定価 とみに本体 2,000円＋税
発行年月 とみに2010年5月

うちだ のぶこ
お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授。専門は発達心理学、認知心理学、言語発達心理学、幼児教育、保育学。著書はほかに、『虐待をこえて、生きる』（共著、新曜社）、『幼児心理学への招待』（単著、サイエンス社）、『子育てに「もう遅い」はありません』（単著、成美堂出版）、『よくわかる乳幼児心理学』（編著、ミネルヴァ書房）など。

近年、子どもを狙った略取・誘拐事件が各地で頻発している。子どもが犯罪に巻き込まれやすいのは、子どもの行動範囲が家から近所へ、さらに小学校へと広がるときである。子どもが最も犯罪に巻き込まれやすい幼児期～児童期にかけての安全教育についてはほとんど手つかずの状態に置かれている。この時期の子どもの心理発達に対する配慮は皆無であり、安全教育の方法論や有効性についても配慮されていない。この問題意識のもと、発達心理学、社会学、教育学を専門とする若手研究者と

安全教育の方途を探る基礎研究に着手した。その成果に基づき、乳幼児期と児童期に分けて子どもの安全・安心をどう守るかについて2冊の啓発書を編むことにした。

本書の特徴は基礎的実証的方法論による知見に基づき、子どもの安全・安心の暮らしを大人たちがどう守るのかについて解き明かし、命の大切さ、かけがえのなさを人々が再確認し、社会の育児機能の復権を唱えようとした点にある。子どもにかかわる多くの大人たち、親や保育者、小学校の先生方に読んでいただきたいと願っている。